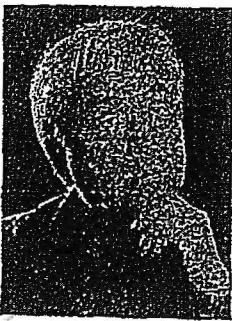


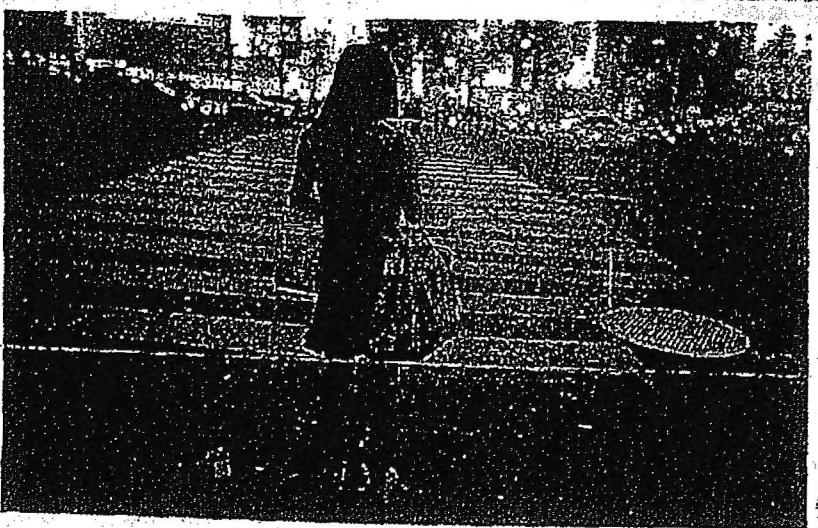
時流

藤原 新也



・ふじわら・しんや 写真家、
作家。44年生まれ。著書に「印
象放浪」など多数。6月初めに
壁を下ろし「表谷」が出る。

なせ殺し合う、母と娘



「おまえの仕事の実体が何でござる？」
娘は驚いて、口を噤んでいた。
「おまえの仕事の実体が何でござる？」
娘は驚いて、口を噤んでいた。
「おまえの仕事の実体が何でござる？」
娘は驚いて、口を噤んでいた。
「おまえの仕事の実体が何でござる？」
娘は驚いて、口を噤んでいた。
「おまえの仕事の実体が何でござる？」
娘は驚いて、口を噤んでいた。

子どもたちの内面の輝き



武内 清
たけうち きよし
(上智大学教授)

子どもたちの内面にはさまざまな感情が息づいています。その感情をいち早く察し、理解し、手

を差し伸べ、子どもたちの日の輝きを引き出したものです。子どもたちは、外で冒険したとき、傷ついたとき、帰ってきて親に報告し、甘え、その傷を癒し、生きるエネルギーを補給します。

（お母さんに「今日 25メートル泳げたよ。黄色い帽子だよ」）（小三男子）（1）

（がんばって、何かを着し遂げた時、その喜

びを一番に共有したいのはお母さんです。

（はじめのひとりたび……たのしかったけれど、やつぱりがいちはんとおもいました。バスをおりておかあさんを見つけると、だきついてしましました）（小一女子）（2）

（キャンプ、張りつめていた気持ちが、お母さんを見てゆるみ、ほっとします。）

「おかあさんにはひどくしかられてしまったわるぎがあつて、やつたんじやないのに、前に先生に／おこられた時とそつくりで／ひどく、きずついた」（十三歳男子）（3）

——先生や友だちからどんなに冷たくされても、母親だけは自分の味方と子どもたちは思っています。子どもが外で傷ついて帰ってきたときこそ、温かくつんとあげたいものです。それは父親であっても、祖父母であつてもいいのです。

しかし時にきびしさも必要です。いつまでもグズグズ言つてゐる子に、親のビシナリといふ一言は、かえつて子どもの気持ちをスッキリさせます。

また、子どもの成長につれ、子どもを黙つて見守ることも必要です。しっかりと抱く時期、下に降ろす時期、黙つて見守る時期を区別し、思春期がきたら、少し子どもの距離をとりましょう。

（無理なんて、しなくていいのだ／自分のできるかぎりの努力ができるいいのだ／考え込むことはない。もっと楽になつてい／＼……素直に、正直に生きていればそれが最高なのだから）（十六歳女子）（5）

（一見、無気力、無関心、無感情、怠惰、反抗と見える子どもたちの内面に、息づいている輝きに心を寄せたいものです。規格品の林檎よりふぞろいの林檎のほうが深い味わいや輝きがあります。その輝きを引き出せるのはやはり身近にいるお母さんやお父さんでしょう。）

いま子どもたちが、友だち社会、学校社会のかで生きていくのに、いろいろ傷つくこと、挫折することが多くあります。はじめにあい、先生や学級の雰囲気になじめず、登校拒否（不登校）をおこす子もいます。

（わたしは、学校の中で／むねがいたくなる／そのたびに／教室と、保健室を行ったり来たり／教室で勉強したい／でも、体が言つことをきいてくれない）（十一歳女子）（4）

登校拒否をおこす子も、その内面には、生き生きした心の動きや輝きがあります。その中身は、

逆に、自分を温かく包んでくれるもの不在は、子どもの心に傷を残します。

ひとりひとりで違っています。

競争のできない子、人の悪口の言えない子、感性の鋭い子、朝に弱い子、動物や自然にやさしい子などは、今のギスギスした社会の中では生きにくいことでしょう。それでも、ひとりひとりがひたむきに生き、自分にあつた輝きを探そうとしています。そのひたむきさを大事にしたいものです。

（ともしび） 第37号（平成2年度） 千葉市教育委員会発行
(1)～(2) 『ともしび』 第37号（平成2年度） 千葉市教育委員会発行
(3)～(5) 石川慶彦他著「子どもたちが語る登校拒否」世耕書房刊